

地域研究コンソーシアム 次世代ワークショップ企画 2010年度
ワークショップ実施報告書

上智大学アジア文化研究所 客員研究員
堀場明子

2010年11月7日に上智大学中央図書館 L-912 で行われたワークショップ「NGOの時代は終わったのかー成熟するアジアの市民社会と日本のNGOの未来ー」は、50人以上の参加者を集め、活発な議論が行われた。第一部では、若手地域研究者によるアジアの市民社会の実態が報告され、インドネシアにおける市民社会の役割の変容、バングラデイッシュの市民社会自体の発展とその問題が指摘された。これらは、地域研究を行い、現地のNGOと密接に関わってきた経験を通しての視点であり報告であった。また、カンボジアの事例から、日本のNGOの介入が増えている原因を浮き彫りにし、NGOが現地社会にどれだけの影響を与えることができるか、現地のニーズに対する日本のNGOの介入なのかどうか、批判的な分析が加えられた。第二部では、「日本の国際協力NGOの現状と課題」とし、日本のNGOの歴史的変遷と現在NGOが直面している問題が指摘された。日本のNGOは、社会運動から組織となり発展してきた経緯がある。その中で、よりよき社会変革を目指していた運動が、組織を運営し、継続的な資金確保や人材確保をするために、重要な理念が失われつつあるという指摘もなされた。またNGOで働く人々の意識の変化と世代間のギャップについても議論がなされた。最後に、このような日本の国際協力NGOの課題がある中で、一つの問題の打開策として、地域研究者と協力し、地域社会を理解し、ニーズを把握した上でより効果的な支援を行うことができるのではとの考えから、特に、災害への緊急支援に対する取り組みについて報告がなされた。またNGOが自治体と組んで活動することの建設的な事例についても発表され、議論は大いに盛り上がった。

本ワークショップに参加した人の中には、通常のアカデミックな研究会では集まらない人々の参加も多く、将来NGOで働くことを希望している人、すでにNGOで働き多くの問題点を共有してくださった人、長年NGOと共に活動しながら研究を行っている学者など様々なバックグラウンドをもつ参加者が多く集まった。さらに、本ワークショップ企画を通して、若手研究者同士の関わりを深めることができた。活発な議論の中で、地域研究がさらに社会との連携、ここではNGOとの関わりを深めることの意義を再確認することができた。また、地域研究の将来的可能性、つまり、地域研究の視点は学問だけでなく、多くの分野で役に立つのではないかという発見があった。現場を歩き、地域の人々の思いを知り、様々な方法で日本とつなぐ地域研究は、これからも社会と連携し発展を続けなければならないと、本ワークショップを通じて改めて認識が深まった。実務者と研究者のネットワークができ、具体的な企画が提案された。引き続き関係構築を具体的な行動を通して行っていきたい。